
機動戦記ガンダムJaeger

剣也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦記ガンダムJaeger

【Nコード】

N2715BA

【作者名】

剣也

【あらすじ】

人類が宇宙に進出して100年以上が経っている。

地球連邦軍、アルビオン帝国、コロニー共和国の間では3年前の戦争以来、大きな戦争はなかった。

しかし……所属不明のMS、UEによってその平和は絶対ではなかった。

そんな時代、どの陣営にも属し、どの陣営にも属さない猟兵の戦いを描いた戦記が始まる。

第1話 獵兵

人類が宇宙に進出し、100年以上が経過していた。

その中で人型機動兵器MSが開発され、戦場の中心となっていた。

そして、世界は三つの国家群によって別れている。

アメリカを中心として圧倒的な物量を有している『地球連邦』

ヨーロッパを中心としてその勢力を拡大し、MSの発祥の国で優秀なMSパイロットを多数保有している超大国『アルビオン帝国』

ラグランジュ3を拠点として複数のスペースコロニーによって形成され、高性能のMSを多数保有している『コロニー共和国』

その三つの国家群が世界の中心となっている。

そして、ラグランジュ4に向かい一隻の小型艇が向かっていた。

MSを一機搭載しか搭載出来ずに一切の武装がなく、個人で活動しているジャンク屋などが愛用しているタイプの輸送艇である。

その輸送艇のブリッジでは二人の人物が座っている。

一人はMSパイロットが着用するパイロットスーツを来ている。

ヘルメットの中からは黒い髪が見え、ヘルメットをしているにも関わらずサングラスをしている。

彼の名はレイヴン・クルーガー。

MS開発やそれを運用するのに必要な母艦や武装を開発し三国家や個人に対して販売している超大手の『モビルスーツ・インダストリアル・カンパニー』

通称、MSICに所属している^{イエーガー}猟兵である。

猟兵とはMSやその他の機動兵器を使い、金で雇われて戦闘や護衛の任につく。

旧世代では傭兵と言われていた。

その中でもレイヴンは上位に位置する実力を持っている。

黒を基調としたパイロットスーツに胸の部分には会社のロゴの「MSIC」と書かれている。

そんなレイヴンは輸送艇のコンソールに足を乗せて、両手は頭の後ろで手を汲んで、全身で暇を表現している。

対象的に操縦桿を握っているのは、10代の中盤にも見える少女、キャロル・ライナーである。

彼女はレイヴンとは違い、パイロットスーツではなく、白いノーマルスーツを着用し、操縦桿を握り懸命に輸送艦を操縦している。

幼く見える彼女もまた、20歳で成人しておりMSICに所属しているメカニックである。

「まだつかないのか？キャロ」

レイヴンは退屈が続いているために、キャロルに尋ねる。

「もうすぐですよ。隊長が操縦してくれるんでしたら、少しは縮ま
りますよ。」

「やだよ。俺が操縦するとお前、寝るもん。自分が操縦している間
に片方に寝られるといらつとしない？」

「寝たんじゃなくて気絶したんです。」

実際、輸送艇が月のMSIC本社から出た時は、操縦において専門
家のレイヴンが輸送艇の操縦をしていた。

しかし、レイヴンは輸送艇の出せる最高速度で進行方向のデブリを
気にすることなく目的地に突き進んでいた。

そのさいに輸送艇と激突しそうになるデブリなどをレイヴンは卓越
した操縦技術を持って紙一重で回避していた。

MSでの戦闘経験が豊富なレイヴンはともかく、実戦経験がある訳
でもないキャロルは輸送艇の速度を極度の緊張感から意識を失って
いた。

それにより、専門家ではないが、最低限のMSや艦艇の操縦の出来
るキャロルがレイヴンの代わりに輸送艇を操縦することになった。

「まあ、それはどうでも良い。だが……何で、俺がラグランジュ4

まで行かないといけないんだよ。」

「確か隊長の専用機の受け取りとその後のデータ集中とフェンリル隊の新人パイロットとの合流でしたよね。」

今回、レイヴンとキャロルがラグランジュ4に向かうのはそのためだった。

M S I C 所属の獵兵の中で優れた実力を持つレイヴンの専用機を彼が今まで乗っていたM S 「シナンジュ」の戦闘データを元に開発したため、その機体を連邦軍がラグランジュ4のコロニーに移送し、そこでレイヴンが受領し、そのままその連邦軍に雇われると言う形で実戦データの収集の任務だった。

だが、レイヴンにはその任務に対しいくつかの不満を持っている。

一つ目は受領するのが、ラグランジュ4である事だ。

宇宙ではコロニー共和国のあるラグランジュ3は完全に共和国領となっている。

アルビオン帝国は、ラグランジュ2を連邦はラグランジュ1をその領地としているが、ラグランジュ4とラグランジュ5はどの勢力の戦力もおかれている云わば、中立地帯となっている。

その上、連邦軍は3年前にアルビオン帝国に対し、一方的に宣戦を布告して、戦争を起こしている。

その結果は連邦軍の敗北で終わったが、その一件や戦後の対応で連邦は帝国だけでなく、共和国からも嫌われている。

連邦は圧倒的な物量を抑止力として、帝国と共和国に攻め入られることはないが、中立地帯では連邦軍と言うだけで攻撃を受ける可能性も出て来る。

そんな中にわざわざ自分の専用機を取りに行くためとはい、レイヴンは気が進まない。

もう一つの不満がそこでフェンリル小隊の新人パイロットとの合流である。

M S I C に所属している猟兵は必ずどこかの小隊に所属している。

レイヴンはその中の一つの小隊のフェンリル小隊の隊長の座についている。

フェンリル小隊にはレイヴンを含めてフェンリル小隊には3人のパイロットが在籍している。

通常の小隊はパイロットは4人から5人が普通なため、3人は少ないと言う事で以前から補充のパイロットを探していたが、隊長のレイヴンと反りが合わない事が多かった。

そんな中、M S I C の社長のエドウィン・シーボルトの推薦で新人パイロットを新しくフェンリル小隊に配属させることとなった。

レイヴンは初めは実戦経験のない新人を入れることに反対だったが、エドウィンがその新人パイロット、エイジ・シーボルト……つまりはエドウィンの息子をフェンリル小隊で面倒を見れば特別ボーナスを出すと言った瞬間に意見を変えて、すぐに了承した。

しかし、エイジと合流するのもラグランジュ4でと言う事になっている。

レイヴン的にはエイジは自分の部下になると言うのに上司である自分が部下を向かえに行くと言う行為が面白くなかった。

「隊長！これ見てください！」

あまりにも退屈だったためにひと眠りしようとしていた、レイヴンをキャロルの大声でレイヴンは仕方がなくモニターをみる。

「こいつは……」

そこには両腕に爪のような武装を持ち、背部には翼と尾がついている神話に出て来るドラゴンを思わせる機体『ガフラン』が映されている。

「UE……」

レイヴンはその機体の名称を口にする。

アンノウン・エネミー……通称UE

数年前から突如として現れた謎のMS。

MSICがどの国家に販売したMSとも共通がなく、攻撃対象も三国家の全てを対象として行われている為、どの国家の物でもないと思われる所属不明の謎のMSである。

MSICでも軍や猟兵が何機か捕獲し、研究しているが装甲に未知の素材が使われておりその強度は通常のMSのビームライフルでは殆ど効果がないとされている。

「どうします。隊長……このままのルートでしたら、目的地のコロニーに行くと思いますよ。」

「けどな……」

確かにキャロルの言う通り、このまま進路を変えなければガフランは二人の目的地のコロニーに向かい、そこを攻撃すると予想出来る。すでに何度もレイヴンはガフランの撃破に成功している。

しかし、レイヴンには問題があった。

この輸送艇にはレイヴンのMSが搭載されていないのだった。

以前はMSICの試作MS「シナンジュ」に搭乗していたが、数日前に同じMSICに所属している猟兵のペリーヌ・ベルリオースに賭けで負け続けて、最終的にシナンジュを賭けて勝負に出たが、その結果敗北しシナンジュをペリーヌに取られていた。

そのすぐ後にシナンジュで取ったデータを元にしたレイヴンの専用機が完成したと聞かされていたため、今はレイヴンはMSを持っていない状態だった。

だが、この輸送艇にMSが搭載されていない訳でもなかった。

AGE-1 『ガンダムAGE-1 ノーマル』

M S I C がエイジ専用に開発した新型のガンダムタイプの M S。

そのガンダム A G E - 1 をエイジの元に届ける予定でもあった。

しかし、レイヴンはこのガンダムに乗りたくはなかった。

A G E - 1 は機体名からも分かるようにエイジの為に設計、製造されたガンダムなのは明白でレイヴンは量産機ならともかく、自分以外の人物の為に作られた M S には乗る気が起きなかった。

「だが、このまま奴らに好き勝手に暴れさせたら、俺の M S が初陣を前に傷物にされかねないな……それにこの距離なら……」

レイヴンは輸送艇の現在位置と速度、ガフランの速度と目的地のコロニーとの距離、前に見た A G E - 1 のカタログスペックから計算する。

「コロニーにつく前に叩くのは無理だが、いる筈の連邦軍が粘ってくれば何とかなるかもな……」

レイヴンはそう結論を出して、座席を立つ。

「キャロ、仕方がない。 A G E - 1 で出る。進路はそのままで出るだけスピードを出せ。」

「分かりました。」

キャロルにそう言い、レイヴンは輸送艇の格納庫に移動した。

格納庫には一機のガンダムが収容されている。

ガンダム特有の頭部に白を基調として胴体などには青や赤のトリコロール、胸部のハッチにはAと書かれた緑色のセンサーがバックパツクにはレーシングカーを思わせるウイングがついている。

固定の武装は左右の腰のビームサーベルだけである。

レイヴンはAGE-1に乗り込むとシステムを立ち上げる。

「ガンダムAGE-1か……俺の隊のMSの相応しい性能が見極めさせて貰う。」

レイヴンはAGE-1の右手に専用のビームライフル「ドッズライフル」と左腕には白字にAを逆さにしたような青い装甲板を重ねた専用のシールドを持たせる。

このMSとしてはオーソドックスな武装がガンダムAGE-1ノーマルの通常装備である。

「レイヴン・クルーガー……出る」

輸送艇から出撃したガンダムAGE-1はガフランを追い、コロニーへと向かう。

第1話 獵兵（後書き）

新作を投稿しました。

誤字、脱字、感想、意見などをどしどし受け付けています。

但し、シリーズのクロスである以上、MSのかなり細かいところの突っ込みは無しでお願いします。

尚、シリーズ間のMSの性能差はこちらの偏見と独断で決めさせて貰います。

その他、一部MSには原作とは異なる設定になる可能性があります。

登場希望のMSがあれば言って下さい。

出来る限り、要望に応えたいと思っています。

タブに書かれているシリーズは確率が高いですが、書かれていない作品でも構いませんが、Gガンは絶望的だと始めに言っておきます。

これから本作をよろしくお願いします。

第2話 獵犬の力

レイヴンが目的地のコロニーの宇宙船のドックに一隻の戦艦が停泊している。

全体的に青く塗装され、特徴的なのは艦首の両舷から前方にMSハッチが戦艦の足のように伸びている

地球連邦軍第7宇宙軍所属の強襲機動特装艦アーケエンジェル級「アジュール」

MSICが試験的に製造した戦艦の一隻が数日前からコロニーの港に入港している。

目的はMSICが開発した新型MSのパーツの運搬である。

その後にアジュールにて新型MSのデータ収集をMSICから頼まれている。

本来なら、一企業の為にそこまでやる必要はないが、MSICはMSの開発、販売において他の企業を圧倒している上に共和国や帝国にもMSを売っている以上、MSICとの関係が悪化すれば、その二国との戦力差が覆る恐れがある以上、連邦もその頼みを無碍には出来なかった。

「それで、お客人の予定はどうなっている。」

アジュールの艦長席でフレッド・オックスフォード大佐がそう言う。

「事前の情報では本日中には本艦と合流予定です。」

副長席についている女性、カーリー・オックスフォード大尉がそう答える。

「艦長！コロニーの管制がコロニーに接近するUEを補足した模様で、本艦に支援要請が出ています！」

アジュールのオペレーターがそう言い、ブリッジのモニターにコロニーの管制から送られて来た映像を映す。

そこには5機のガフランが映されている。

「我々以外の戦力は？」

「作業用の機体しか……」

このコロニーは中立なため、様々な船が入港するため、自分達以外の戦力も期待していたが、運悪く現在戦闘可能な戦力を有しているのはアジュールのみでその他はコロニー外で作業するために使われるMSしかなかった。

当然の事ながら、それらがガフランを相手にすることが出来ないことは考えるまでもない。

「MS隊を急がせろ！本艦も戦闘に備える！」

そのため、フレッドが取る行動はそれしかなかった。

フレッドの指示でアジュールはドック内で戦闘体勢を取る。

アジール自体がコロニーの外に出ようとすると、時間がかかるため、先にMS隊を出撃させるためにアジールのハッチが開閉する。ハッチにはリゼルが移動して来る。

R G Z - 9 5 「リゼル」

地球連邦軍の次期主力MS

地上での主力の空戦用MS「フラッグ」の欠点の火力と装甲の薄さを補うためにMSICが連邦の主力MS「ジェガン」に可変機構を取り入れて製造されている。

しかし、未だに量産ラインを完全に確保している訳ではなく、連邦の宇宙軍に少数が配備され、現在でも地上ではフラッグを空戦戦力として運用しているのが現状だ。

アジールにもリゼルはこの一機のみが配備されていた。

「ジャクソン・ホーキンス…出る」

リゼルが射出されると、次はスタークジェガンがカタパルトに固定される。

R G M - 8 9 S 「スタークジェガン」

連邦の主力MS「ジェガン」の武装換装を前提としたD型に3連装ミサイル・ポッドや追加の装甲などを装備した重装備に対艦仕様の機体で、今回は左腕にシールドと、右手にハイパー・バズーカを

持っている。

「敵はUEか……ウエンディ・マクダエル、出撃します」

スタークジェガンが射出され、その後に3機のジェガンが射出され、迫るガフランに対応する。

「今日の敵はUEだ。共和国との小競り合いとは違う。各機、油断するなよ。」

「了解」

まずは、ウエンディのスタークジェガンが迫る5機のガフランに3連装ミサイルを放つ。

ガフランは腕に内蔵しているバルカンでミサイルを迎撃すると、戦闘が開始される。

「一機つづ囲んで落とせ！」

ジャクソンの指示で三機のジェガンは一番近くのカフランに狙いを定めてビームライフルを放つ。

ガフランの装甲にはジェガンのビームライフルは殆ど効果はないが、それは普通に直撃した場合の話で、ガフランの腹部の拡散ビーム砲や各関節に上手く当たれば、ジェガンのビームライフルでも十分に効果はある。

腕の良いパイロットなら一人でも出来るが、一般的なパイロットでは難しく、今回のように複数のMSで囲んで集中的に攻撃して落と

す方法が一般的な方法として使われる。

だが、そのガフランはジェガンからのビームをかわして、ビームサ
ーベルで一機のジェガンを両断する。

そして、そのままコロニーに向かっていく。

「抜かれたか！マクダエル！奴を追え！」

リゼルは別のガフランにグレネードランチャーを放ち、指示を出す。

「了解しました」

ウェンディは撃ち尽くしてデットウェイトとなっている肩のミサイ
ルポッドをパージすると、コロニー内に侵入したガフランを追った。

外で戦闘が開始された頃、コロニー内部でもUEの襲撃に伴い、非
難が行われている。

そんな中、コロニー内の工場区画を一人の少年が走っている。

少年の名はエイジ・シーボルト

今年からMSICで猟兵となった少年である。

エイジはUEの襲撃の知らせと避難が始まると、コロニー内の工場
区画を目指した。

工場区画なら何かしらのMSがあり、自身でUEを撃退するために使える機体を探すためだ。

しかし、そう簡単に使えるMSが見つからなかった。

工場区画のMSはどれも組立中で使いものにならない物が多く、エイジは幾つもの格納庫を探しているとエイジはそれを見つけた。

全身が純白の装甲を持ち、頭部には特徴的な一本角を持ったMS

RX-0 「ユニコーンガンダム」

「何だ……コイツ、見たことのない機体だけど……連邦の新型か？」

エイジは勉強は好きではなかったが、将来MSのパイロットとなるためにMSの勉強だけは欠かさした事はなかったが、このユニコーンは見たことがなかった。

それもその筈である。

このユニコーンこそが、レイヴン専用開発されたMSで幾ら、MSICの社長の息子とは言えそのデータを見る事は出来ないのは当然の事だった。

「なんでも良い。コイツを使わせて貰うか」

エイジはユニコーンのコックピットに上り、乗り込むとシステムを起動させる。

本来なら、システムにロックをかけている筈だが、幸いにもユニコ

ーンはアジュールにパーツの状態このコロニーに持ち込まれて、U
Eの襲撃が開始される直前に完成していた。

そのためにシステムのロックをかける前に作業員も避難したために、
エイジでもシステムを起動出来る状態にあったのは運が良かったと
しか言いようがない。

「動くぞ……」

エイジはゆつくりとユニコーンを動かして、格納庫から出る。

ユニコーンが格納庫から出ると、すぐに警報が鳴り響く。

「敵！コロニーの中に入りこまれたのかよ！」

モニターにはコロニー内部に入り込んだガフランがユニコーンにバ
ルカンに向けている。

「この！」

ガフランがバルカンを放つ前にペダルを踏み込み、ユニコーンはジ
ャンプしてガフランのバルカンを回避する。

「何だ……このMS……並みの出力じゃない。」

エイジはジャンプ時に思った以上のGを受けてそう言う。

「何か……武器は……」

エイジはコンソールを操作して、ユニコーンに搭載されている武器

を探す。

「武器は……バルカンにビームサーベルだけかよ!」

本来、ユニコーンには専用に開発されたビームライフルとバズーカ、シールドが用意されているが、現在はそのどれも装備していない。

ガフランはビームサーベルを展開して、ユニコーンに切りかかる。

「こんなところで……」

ユニコーンは腕のビームサーベルを抜いて受け止める。

「死ねるかよ!」

そして、そのままユニコーンはガフランを弾き飛ばす。

「パワーもすげえ……行ける!」

ユニコーンはビームサーベルでガフランを追撃するも、ガフランは飛びあがって避ける。

「素早い!」

ガフランは空中から、尾のビームライフルをユニコーンに向けるが、ガフランはビームライフルを放つ前に吹き飛ばされる。

「何だ……」

「そのMS、聞こえるか? 今だ、止めを刺せ!」

エイジは突然の横槍に戸惑うが、ガフランはその一撃で体勢を崩し、地面に落ちていたため、エイジはスラスターを全開にして、ガフランに突っ込み、腹部の拡散ビーム砲にビームサーベルを突き刺す。

ガフランはそのまま爆散した。

目の前の敵を撃破したことでエイジは少し余裕を取り戻して、援護してくれたMSをみる。

そのMSはミサイルポッドをパージしたウェンディのジェガンだった。

ウェンディはコロニー内に入るとユニコーンとガフランとの戦闘を発見し、向かいあの場合でハイパー・バズーカをガフランに放っていた。

「こちらは連邦宇宙軍所属のウェンディ・マクダエル少尉だ。そちらの所属を明らかにせよ。」

「えっと……所属はMSICでエイジ・シーボルトです……」

「了解した。まだ、戦う意思があるのなら、私と来い。外での戦闘が終わっていない。」

ウェンディがそう言いエイジはすぐに決断した。

「分かりました。俺も行きます。」

エイジはそう言い、ウェンディとともにコロニーの外に向かってい

く。

コロニーの外の戦闘は連邦軍の不利だった。

始めにジェガンが一機撃墜され、突破されてからすぐにもう一機のジェガンも落とされ、今また、三機目のジェガンが落とされた。

「化け物が！」

ジャクソンのリゼルがビームライフルを放つが、ガフランは回避する。

そして、4機のカフランから集中砲火を浴びるが、シールドを使いながら回避するが、右足に被弾する。

「くそ……」

「隊長！」

だが、コロニー内に侵入したガフランを撃破し、ユニコーンとともに外に出たウェンディのジェガンがハイパー・バズーカで援護する。

「マクダエルか！内部の奴はやったのか？」

「はい。」

「そいつは……例の新型か。戦えるのか？」

「何とか行けます！」

「なら頼む。」

そして、ユニコーンはビームサーベルを持ってガフランに振り下ろすが、ガフランはコロニー内で人工重力の影響を受けていた時とは違う機動性でユニコーンの一撃をかわして、バルカンを放つ。

ユニコーンは回避するも、動きに無駄があり過ぎて、他のガフランがビームサーベルで切りかかり、何とかビームサーベルで受け止める。

「何だよ……さっきは上手く行っただのに！」

ユニコーンはガフランを弾き、ビームサーベルで反撃しようとするも、ユニコーンはガフランよりもずれた位置を攻撃する。

「この機体……敏感過ぎるぞ！」

ユニコーンはエイジの少しの動きに反応して動くために無駄な動きが多くなっていた。

「何をやっている！」

ジェガンがハイパー・バズーカでユニコーンを援護するが、ユニコーンの動きが良くはなく、隙だらけだった。

そして、一機のガフランがビームサーベルを展開してユニコーンに突っ込む。

「やらせるか！」

ユニコーンはその一撃を完全に避けるが出来なかったが、間にリゼ
ルが割り込む。

「隊長！」

そして、ガフランのビームサーベルがリゼルを貫く。

「ウソだろ……」

ガフランはビームサーベルに突き刺さっているリゼルを放るとリゼ
ルは爆散する。

「隊長……」

だが、ガフランの攻撃は終わっていない。

ガフランは再び、ビームサーベルを振り上げる。

今後こそ、エイジは終わりだと思ったが、ガフランの横っ腹にビー
ムが突き刺さりガフランが吹き飛んだ。

「何だ……」

「増援など聞いてないぞ。」

二人は突然の自体に戸惑うが二機に通信が入る。

「何とか、持ちこたえたみたいだな。感心感心。この際、俺の機体

「が何で戦場にいんのかは後回しだ。」

「何だ、アンタ……」

「俺？俺はM S I C所属の猟兵、レイヴン・クルーガーだ。」

「レイヴン・クルーガー……まさか、ハウンド 猟犬……」

ウェンディはレイヴンの名を聞き、その名を口にする。

ハウンド
猟犬

とか彼の通り名である。

レイヴンの小隊のエンブレムは狼でそれとレイヴンの仕事っぷりからその名で呼ばれることが多い。

「その名前は好きじゃないんだよな。うちの隊のエンブレムはフェンリル、狼なんだよ。犬つこと一緒にして欲しくないんだよね。」

レイヴンはそう言いながらもA G E - 1のドズライフルでガフランに狙いを定めている。

「取り合えず、今はこいつらを始末する方が先だ。」

レイヴンはそう言いながら、引き金を引く。

ドズライフルから放たれたビームは正確にガフランを撃ち抜く。

「成程……良い威力だ。後二機」

AGE - 1はガフランに向かっていく。

ガフランは一機は尾のビームライフルでAGE - 1を長距離から狙い、もう一機のガフランがビームサーベルを展開して近接戦闘を仕掛ける。

前衛のガフランの一撃をAGE - 1はシールドでいなす。

そして、後衛のガフランがビームライフルを放ちAGE - 1はシールドで防ぐ。

「成程……一機が後方支援で援護して、片方が近接戦闘で仕留めるね。戦術の初歩だな。」

AGE - 1はガフランのビームをかわしながら、ドズライフルを自機の脇の下から後方に向ける。

「だったら、お前は俺の背後を取るのがセオリーだ。」

その銃口の先にはビームサーベルを構えるガフランがいる。

「三機目だ。」

ドズライフルからビームが放たれて、背後のガフランが撃墜される。

「そこで、お前が最後だ。」

AGE - 1はドズライフルのフォアグリップを握る。

ガフランはビームライフルを放つが、AGE-1はそれを機体スレスレのところで回避して、ドズライフルで最後の一機を仕留めた。

「これが……ハウンド 獵犬の力と言う訳か……」

ウェンディは自分達が苦戦したガフラン3機をあつと言う間に仕留めたレイヴンの実力を真近で見てそう言う。

「さて……邪魔な連中は片付いた。戻っているところと聞かて貰うぞ。」

「ああ……了解した。我々の母艦に来てくれ」

レイヴンの介入により戦闘は終結し、三機は宇宙港に入港しているアジュールに帰還した。

第3話 新たな目的地

レイヴンの介入でガフランを撃退し、アジュールに三機のMSが帰投している。

「生き残ったのは私だけか……」

ウェンディはジェガンから降りて、ヘルメットを取り咥く。

そして、ウェンディは頭を振り、顔や髪についていた汗を軽く飛ばす。

茶色の髪を短く切り揃え、中世的な容姿をしているウェンディは美少年のようにも見える。

軽く汗を飛ばした、ウェンディは格納庫を見渡す。

出撃前には自分のジェガンを含めて4機のジェガンと隊長機のリゼルの5機のMSが置かれていたが、現在はウェンディのジェガンにエイジが乗っていたユニコーンとレイヴンが乗って来たAGE-1の計3機のMSが置かれているだけだった。

戦いに生き残っても自分以外の友軍機は全滅しているため、ウェンディは素直に喜べない。

「生き残ったのはアンタだけか？」

物思いにふけていたウェンディにAGE-1から降りて来たレイヴンが声をかける。

レイヴンもすでにヘルメットを外し、小脇に抱えている。

その表情に一切の疲れを見せないレイヴンにウェンディは彼にとって先程の戦闘が取るに足らない程度の戦闘であった事を知り、少しイラつく。

「君が^{ハウンド}獵犬か？噂は聞いているよ。」

「噂ね……一体、どんな噂やら……」

「腕は超一流だが、それと同じくらい態度も悪いと聞いている。」

普段のウェンディなら、ここまで挑発的な態度を取ることもないが、戦闘後で尚且つ、戦闘で小隊が全滅しているなどもあり、無用に挑発的になるが、レイヴンは大して気にした様子はない。

「生憎と君と違ってまともな教育を受けている訳ではないもんでね。」

「なっ！」

だが、レイヴンはウェンディの挑発的な態度に挑発的な態度で答える。

それはウェンディの素性を知った上での言葉だった。

彼女の父親は地球連邦議会の議員、グレン・マクダエル。

レイヴンはその仕事柄、政府の要人の家族構成などは一通りは頭の

中に入っている。

そのため、ウェンディとは直接面識はないが、その顔くらいは知っていた。

「何で、マクダエル議員の令嬢がパイロットになってるかは知らないが、戦場で生き残った奴がそんな死にそうな顔をするもんじゃない。出ないと死んだ奴に失礼だ。」

レイヴンはそう言い、ウェンディの肩をポンと叩いて、格納庫を出て行く。

ウェンディはそこで自分が思った以上に隊の全滅にショックを受けしており、それが顔に出ていたことに気づき、振り返りレイヴンの方を見るがレイヴンは振り返る事なく、格納庫から出て行った。

格納庫を後にした、レイヴンは艦長のフレッドの執務室を訪れていた。

「MSICから派遣されて来た、レイヴン・クルーガーだ。」

レイヴンは明らかに自分よりも年上であるフレッドに対しても臆することなくそう言う。

その態度にフレッドの横に控えているカーリーは一瞬、ムツとするも当のフレッドはそのことに対しては何も言わずにいるため、レイヴンを睨みつけるだけに留まる。

「アジュール艦長のフレッド・オックスフォードだ。こっちは副官のカーリーだ。」

「どうも」

フレッドに紹介されたが、第一印象が悪かったため、カーリーは非情に無愛想にしている。

「先の戦闘では助かった。君のお陰で私の部下が一人でも助かった。」

「

「気にすることはないさ。俺は俺の機体を守ったに過ぎないからさ」

レイヴンの言葉は謙遜ではない。

彼にとっては戦場に出る以上、いつ死んでもおかしくない。

戦場に出ると言う事はそれ覚悟した上での事だと思っている。

それ故にレイヴンは仲間ではない連邦のパイロットが戦場で死のうと関係はなかった。

仲間でなければ、助ける必要はないと判断していたが、彼の予想外にユニコーンが戦場に出ていたためにその場でガフランを全機仕留めたに過ぎなかった。

「それでも、部下が助けられたことは事実だ。その事には礼を言う。」

「

フレッドはそう言い、レイヴンにふかぶかと頭を下げる。

「まあ、そう言う事なら一応は受け取っとく。それで、今後はどうする？UEは全機仕留めたんだろ？だったら、当分はUEの襲撃は来ない筈だ。」

「そうだな。警戒はさせているが周囲にUEの影はない。」

先程までとは打って変わり、フレッドはすぐに仕事の話に取り掛かる。

「そっちにも行っていると思うが、俺の次の任務はこの艦で新型のデータを集めることだ。期間は今んとこ未定だ。」

「その話はこっちにも来ている。」

「本艦にもすぐに司令部より次の任務が来る手筈になっています。」

「だったら……」

カーリーがそう言い、レイヴンが何やら考える。

「どうした？何か問題があるのか？」

「問題がある訳じゃない。俺のMSはさっき見たところ、武装は固定のみで丸腰だろ？」

エイジが緊急的にユニコーンを動かしたために、レイヴンの言う通りユニコーンの武装はまだアジュールには搬送されていない。

「だから、俺がMSで取って来る。ついでに俺のMSを勝手に動か

した新人と一緒にね。」

「貴方がですか？」

「そつ、コロニー内の工業区画に行くだけだしな。幸い、まだコロニー内に避難勧告は解かれていない。今ならコロニー内でMSを使っても問題ないだろ？それに慣熟も速い内にやっておきたいしな。」

レイヴンがそう言い、フレッドは少し考えるがすぐに答えた。

「良いだろう。許可する。但し、分かっていると思うがコロニー内に被害を出すことはないようにな。」

「そんな素人のミスは俺はしないって、俺はね。と言っても新人の方は保証出来ないけど、戦闘でもないのにコロニー内に被害を出すとなが面倒なんで、出さないようにはするから安心して言いぜ。」

レイヴンはそう言い、執務室を出て行く。

レイヴンが格納庫を出てすぐ入れ違いにキャロルの操縦する輸送艇がコロニーに到着し、積んでいた物資をアジュールに搬入した。

そして、キャロルはすぐに格納庫に置かれているユニコーンとAGE-1の両肩にマーキングを開始した。

MSICに所属している猟兵にはいろいろと規則が存在している。

必ず、小隊に属することと搭乗機にあるマーキングを施すと言う事だ。

それを機体のすぐに見えるところに入れることが義務付けされている。

そのマーキングとは小隊のエンブレムと小隊ナンバーの二つ。

小隊のエンブレムとはその小隊で共通の物を入れる。

レイヴンのフェンリル小隊では、狼のエンブレムが機体の右肩に入れている。

そして、小隊ナンバーはエンブレムを含めて、機体を見ただけでパイロットを特定出来るように入られている。

レイヴンのユニコーンには01、エイジのAGE-1には04のナンバーがそれぞれの左肩に入れられた。

マーキングが終わると、キャロルはユニコーンの微調整に入る。

そのすぐそばにはユニコーンに興味を持ったエイジやウエンディもキャロルのコンソールを覗きこんでいる。

「どうしたんですか？」

「この機体、見たことがないんだけどさ、新型なのか？」

エイジはユニコーンを見つけた時に持った疑問をキャロルに投げか

ける。

「そうですよ。MSIICが隊長専用に開発した新型機です。その名もユニコーンガンダム」

「ガンダム？」

ウェンディはその名前に首を傾げる。

ウェンディの『ガンダム』と言う機体名には心当たりがある。

MSのパイロットなら、誰もが知っている伝説のMS

MSを開発したアルビオン帝国が当時の主力機のザクとは別の系統の技術で作られたMSで当時では破格の性能を持っていたとされている。

その後もその名にあやかり、高性能機には『ガンダム』と言う名称がつけられることが多い。

現在でも公にされているだけでアルビオン帝国にはガンダムエピソード、ガンダムサンドロック、ガンダムヘビーアームズ、ガンダムデスサイズ、アルトロンガンダムの5機、コロニー共和国でフリーダムガンダム、ジャスティスガンダム、プロヴィデンスガンダムの3機が、MSIICでもストライクガンダムEが使用されている。

ガンダム自体には様々な特性を持っているが、どれも共通しているのが頭部にツインアイと額のV字、またはそれに近い形状のアンテナになっているケースが殆どである。

だが、このユニコーンガンダムはゴーグル状のカメラアイに頭部には一本の角が付いており、到底ガンダムには見えない風貌をしている。

「多分、隊長が設計の際にガンダムが良いって言っていましたから、それで機体名にもガンダムって入っているだけだと思いますよ。」

「彼はガンダムに特別な思い入れでもあるのか？」

「ないと思いますよ。隊長は腕は良いですけど、少し……いえ、かなり自己顕示欲が強いですからね。戦場ではガンダムタイプのMSは目立ちますからね……」

キャロルは普段のレイヴンの行動を思い出して、苦笑いしながらそう言う。

「聞いていた通りの性格と言う訳だな。」

「大きなお世話だ。それと、キャロしゃべり過ぎだ」

レイヴンは三人の元に来るとキャロルと小突く。

「コイツをすぐに動かせるか？」

「勿論ですよ。なんなら、すぐに艦隊クラスの相手でも隊長なら行けますよ。」

キャロルは自信満々で答える。

「流石だ。新入り、すぐに出るぞ」

「何かあったのか？」

すぐにユニコーンを出すと言ったレイヴンの対して、ウェンディはそう言う。

すぐに出すと言う事は出す自体になったと判断したからだ。

「その新人が俺の機体を勝手に出した時に武器とか予備パーツとかを置いて来たからな。それを取りに行く。アンタは艦で待っていて構わない。新人は自分の機体に乗ってすぐに取りに行くぞ。」

レイヴンはそう言い、ヘルメットを被り、ユニコーンに乗り込んだ。

「君のガンダムもすぐに出せるようになってるから」

「分かったよ。」

エイジもAGE-1に乗り込んだ。

UEの襲撃で住民の避難した、コロニー内は静かでゴーストタウンを思わせる。

コロニー内の資材搬入用のリフトからユニコーンとAGE-1がコロニー内に降りて来る。

「内部は以外と被害は出てないんだな。」

「内部に侵入したのは一機ですぐに俺とあの人とで撃破しましたから」

「新人がか？」

「勝手にMSを使った事は謝りますが、事態が事態でしたので……」

「別に良いさ……（だが、コイツは俺用に調整してある。宇宙では扱い切れなかったようだが……それでUEを一機落としたって事が……成程な鍛えれば或いは……）」

ユニコーンは始めからレイヴン用の調整がされている。

レイヴン用に調整された機体を動かすのは相当の技量が必要とされる。

宇宙ではそれを扱い切れなかったが、疑似重力化ではそれなり扱いこなせたと言う事はそれだけで潜在的に高いセンスを窺わせる。

始めは社長からのボーナス目的でエイジを小隊に入れたが、思わぬ収穫の可能性が出て来て、レイヴンは内心ほくそ笑んでいた。

「それよりも、気をつけるよ。バランスを崩してコロニー内の建物を壊してみる、修繕費はお前の給料から差し引かれるぞ。お前は新人で給料も低いんだ。下手こくとすぐに借金生活だぞ。」

「気をつけてますよ。それよりもさつきから、俺の事新人って呼んでますけど、名前で呼んでくださいよ。」

「やだね。お前が一人前のパイロットになるまでは新人で十分だ。悔しかったら、俺に一人前だと認めさせてみる。」

二人が話ながら、コロニー内の公道を進んでいると工業区画に入り、ユニコーンのおかれていた格納庫につく。

「ここだな。ここから、コイツの武器と予備パーツをアジールに運びこむが気をつけろよ。この作業はお前が思っている以上に繊細な作業だ。武装やパーツを使う前に傷付けてみる、お前の給料で弁償だからな。」

レイヴンはそう言い、格納庫内のユニコーンの武装と予備パーツを運び出す。

レイヴンは何度もこの手の任務をこなしているため、簡単に運ぶが今回初めてAGE-1に乗り、この手の任務の経験のないエイジは何度もレイヴンに叱られながら、四苦八苦しながら荷物をアジールに運んだ。

ユニコーンの武装などをアジールに運んだレイヴンはエイジとともにアジール内のブリーフィングルームに呼び出されている。

ブリーフィングルームには二人以外にも艦長のフレッドに副長のカーリー、MS隊の代表としてウェンディが集まっている。

格納庫ではキャラルが回収したユニコーンの武装をチェックしてい

る。

「それで俺達を呼んだと言う事は次の任務が決まったと言う事か？」

「まあな……」

フレッドは齒切れが悪く答える。

その様子から、レイヴンは任務の内容が思わしくない物だと予測した。

「軍司令部から来た命令分はアジュールは準備が整い次第、ラグラ
ンジュ4のポイントS442Rに向かえと言う事です。」

「成程な……司令部も無茶を言う」

レイヴンはそれだけで、司令部の意図を理解するが、エイジは今一
つ理解出来ずにおり、ウエンディは黙りこんでいる。

「そこになにがあるんスか？」

「ポイントS442R……そこにはUEの拠点があると言われてい
る」

レイヴンがそう言い、ウエンディが続ける。

「つまりは……司令部は……我々にそこに向かい。そこのあるとさ
れるUEの拠点を落とせと言う事だろう。」

「少尉の言う通りだろう。」

「それで、艦長…増援はどうなってますか？流石にこの戦力でUEの拠点を落とせと言うなら、俺達に死んで来いって言うてるのと同義だって事は分かっている筈だぜ。」

今までUEの拠点が分かっているにもかかわらず、UEの戦力が集中しているからだった。

UEに対して数で囲んで集中砲火をすることが有効とされているが、それは自分達が数で圧倒している場合でなければ成立しない。

連邦軍も3年前の戦争で戦力を消費し、現在はそれを補う事に必死となっている。

「一応、増援は送ると言っているが、どの程度のものか当てるは出来んだろうな。」

「それにMS三機で攻めきれぬ訳がない。」

「だったらどうして、そんな命令が出るんですか。勝てもしないのに……」

エイジの尤もな問いに、レイヴンがため息をつきながら、答える。

「お前も3年前の帝国との戦争は知っているか？」

「まあ……」

「連邦は3年前に難癖をつけて戦争を吹っかけて、負けてるだろ？そんな時に指揮官が馬鹿だよ。帝国に敗北し、当時の皇帝にいたば

かりのウォーレン・A・アルビオンが賠償金で手を打とうと言っ
た。その時に自国の被害を言いだして、賠償金を値切りつたんだそ
うだ。自分達が難癖をつけた癖にだ。まあ、連邦のもっと上の方は
賢かったんで、そいつを左遷して賠償金に応じたんだけどな。だけ
ど、連邦が賠償金を値切つたと言う事実は残る。戦争のきっかけを
含めて、それで連邦の他国からイメージはどん底、連邦はイメー
ジアップに躍起なのさ……だから、三国家で共通の敵であるUEの
拠点を叩く事でイメージを上げたいんだろうよ。」

レイヴンの説明の連邦サイドの三人は顔を顰める。

三人にとっても当時の指揮官の行動は友軍にとっても恥とされてい
る。

「だかと言っても、3機で落とすのは無理だぜ?」

幾ら、ユニコーンとAGE-1を投入しても、UEの拠点を3機の
MSで落とすのは到底不可能としか言いようがない。

「ですが、すでに命令は発令されています。」

「だよな……艦長、少し寄り道は出来るか?」

「寄り道だと?」

「そつ、そこに行く途中で、うちの小隊の連中を呼ぶ。そいつらを
入れれば、少しはマシになると思う。」

3機では無理でもレイヴンの小隊の2人を含めれば5機となり、そ
うなれば3機で攻略するよりかは可能性出て来る。

「無論、その場合は報酬は上げさせて貰うが、どうする？」

「良いだろう。」

フレッドは迷う事なく答える。

どの道、このままでは敗北は目に見えている。

金で勝率を上げることが可能なら、それで上げる事をフレッドは選
択した。

「それで、どこで合流する？合流するにしても物資や食糧の補充も
必要だ。」

「それなら打って付けの場所がある。ここだ。」

レイヴンは宙域図の一点を指さすが、そこには何もない。

「何もないが？」

「宙域図には表示されないけど、今は多分この辺りをうろついでい
る筈だ。俺達の小隊の拠点があるメガロポリス8が」

レイヴンがそう言い、アジュールの次なる目的地が決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2715ba/>

機動戦記ガンダムJaeger

2012年1月10日01時50分発行